

先輩後輩

「憧れの城南に入学、即挫折」

23期

細谷一郎

当時の公立中学に通っている生徒が都立普通科に進学することは、誰も信じて疑わない一番望ましいコースだった記憶がある。学校群が始まって敷居が高くなったか低くなったかは知らないが、受かってどこかに振り分けられるなら12群だったら城南に行きたいなと思っていた。

決まった時は本当に嬉しかった。最初の頃は、体育の校外一周マラソンで犬を散歩中の渡辺貞夫さんに出会ったり、コースを左にそれると有栖川公園で、肉屋で買ってきたコロッケを頬張りながら「ああ、六本木、城南」なぞと一人ほくそ笑んでいた。

そんな、胸を膨らませての新生活が始まった訳だけど、最初のテストの学年順位で、中学ではそこそこ出来る部類だったという自負は叩きのめされることになる。そりゃあ同じ様な奴が集まれば厳しいよな、こりゃまずいと少し勉強したらちょっとは良くなったけれどたかが知れていて、だんだんどうでも良くなって、好きなドラムに、まあ逃げたんでしょね、良く言えば没頭しました。叩かれ弱い奴が、叩く物に熱中するところが面白い。

当時の理想的な高校生は、アイビーで決めて、バスケットが上手で、音楽は加山雄三なんてのが定番だったけれど（若大将なんか今見るとギャグだけど）私は最初に影響されたのがハードなJAZZで、ビートルズとかGSにはまったく興味を持たない理想とは程遠い高校生だった。やがて、長髪で武装し相当怪しい外観になっていくことになる。そのうちバンドをやろうという事になって文化祭ではめでたくライブが出来たけど、音楽担当の三輪先生にとってはロックバンドなんてのは悪魔の所行に見えたのだろう。教室で練習していると青筋立



Photo by 鍋島徳恭

ててアンプのボリューム下げに来た。後に同じ音大の後輩となる訳だが、大学でもリズム音痴な声楽科とドンパチうるさい打楽器科は天敵だったのがおかし

い。

この時代に見よう見まねでやっていた事が後になって財産になったのは間違いない。我々の世代は音楽が一番創造的で良かった時代を同時進行で体験出来ていたのだから。文化、社会等に関しても同様だったと思うし、学生運動などもあり、今の若い世代よりは社会や人生について考えるきっかけも多かったと思う。この私でさえ三島由紀夫事件など、授業をさぼって十番のそば屋でカツ丼食いながら TV で見ていたものだ。

そうこうするうちに、3年になると進路指導が入る訳で、私はなぜか野郎ばかりの理数科クラスに籍を置いていた。話せば長いけれど、家は意外や堅い家庭で、爺さんは品川警察の刑事（娘に恋文送った男を逮捕した）、親父は専売公社で、どうも私を歯医者にしたかったらしい。それで理数科クラスにさせられた。しかし数 III あたりになってくると log までは何とか、それ以降は意味不明...、共学クラスが羨ましく思えたものだ。いまだに数学が出来ない夢を見る。（村上先生ごめんなさい）

当時、大学だったらハイソサエティーorcの早稲田かライトミュージックの慶応に入り、どちらかの JAZZ 研に所属するのがドラム少年の憧れだった。「ああ、どちらかの付属に入っておけば楽勝だったのに」と泣き叫んでも後の祭り。色々考えて英数国の3科目しか無くて、後は太鼓叩ければ何とかなるだろう、「そうだ音大だ！」の結論に行き着く訳である。そして、進路指導当日、「オラ音楽大学に行くダ！」。この時の担任だった徳重先生の顔は忘れられない。全く前例のない化学的に解析不可能な解を求められたのだろう、頭の艶は失せ、目は点になっていた。しばしにらみ合いの後、「ウム、頑張れよ」と絞り出すような一言であっけなく終わった。

そして、国立音楽大学の打楽器専攻に入る訳だけど、男女比 30 対 1 くらいで、体育のジャージの臭さを争っていた男クラスとは別世界であった。JAZZ とドラムに憧れて入った国立も、山下洋輔さんたち JAZZ 系の一派はとっくに卒業していなくなっていて、本来のクラシック音楽の学校の落ち着きを取り戻していた。私は諦めて、毒を食らわば皿までと、人生で一番勉強した 4 年間だった。

卒業してみるとなかなか大変で、N 響の仕事や、得意のドラムで商業録音等やりながら食いつなぐことになる。そのうち色々分かってくると、「オーケストラは生まれも育ちも考えも違う気の合わない 100 人が仕事の時だけ気を合わせる集団である」という偏見に至るし、当時は沢山あったスタジオの仕事も、若い者には漬け物の CM や教育番組のテーマ録りなど、単なる音の切り売りばかりで、「ギャラ以外自分に残るものはあまりないよな」なぞと生意気になってくる訳です。こんな気持ちが湧いて来たのは城南時代に影響を受けた音楽のせいかもしれない。私が夢中になっていた商業主義が蔓延する



Photo by 鍋島徳恭

前の音楽はオリジナリティーのある唯一無二の創造性が命で、今やっていることはその正反対、「創造性皆無ではないか」という疑問からだった。まあ、若かったし純粋ではあった。で、ルーツを求めてふらふらと日本音楽、「邦楽鳴り物」の門を叩く事になりました。この行動パターンは学業にめげてドラムに逃げた城南時代とそっくりである。因果は巡る。しかし、その甲斐あって外国へ行く機会が多くなった。これは輪廻転生がうまくいったのかもしれない。なんやかやで、40カ国5大陸行ったけれど、楽しいことと厳しい現実を体験できた。

アメリカなどは自由の国なんて嘘っぱちで、コネと官僚的の極致であった。アメリカ大使館でワーキングビザを取る時、招待でしかも外務省仕事なのにもかかわらず、「お前が来なくても上手い奴はいっぱいいるから出せない」と門前払いを食らったことがある。ヨーロッパでは、お客様のうちは良いけれど、深く潜入するには貴族の知り合いが居ないと駄目である。これらの国で永住権を取って活躍されている方々は尊敬に値します。

まあそれでも、80年代から90年初頭くらいまでは山下洋輔さんと面白おかしいツアーを重ねた。機密費その他で問題になる前の外務省派遣はかなりの大名旅行で、外交官パスポートが発給され、本番週1~2回、ホテルや飛行機上等、もう時効だと思ふけれど、帰りの機内で個人で使ったクレジットカードの

清算までしてくれた。地位とお金があるとはこういうことかと学習しました。

一番面白かったのはアフリカとブラジルだったかな。アフリカは相当危なかったけれど、前日に襲われた大使館員の制止を振り切って毎晩夜の街へ繰り出した。酔いつぶれて正体不明になった奴が床に転がっている酒場や、怪しい界限で友達作ってコンサートに呼んだらそいつの本業はスリとか、夜、現地人の車に乗っていると「ここは伏せててくれ、外人が乗っているとマシンガンで撃たれるかもしれない」でチビリそうになった事もある。どちらの国も多々問題は抱えていたけれど、音楽に関しては一言「熱い」状態が印象的だった。

現在の音楽界は極端にいうと、制作会社が仕掛けた1バンド1民族音楽状態で、飛び入りセッションや楽屋に勝手に顔を出しての音楽談義など意味を持たないけれど、上記の国では60年~70年代の新宿のような、グジャグジャな中から化学反応のように生き生きとした音楽を生み出す雰囲気息づいていた。

とまあ、ジタバタしているうちに年はとる訳で、いつまでも体を張っての演奏だけではなく、何か残るものに関わりたいという気持ちが芽生えてくる。これは、60年近く人間やってくるといういろいろ枯渇してくるのを悟ってまとめに入りたがるのかもしれない。世間的にいえば名誉欲かな？でも、企んでうまくいくものではないし、そういった守りの姿勢に入ってしまうと音も発想も面白くなるようだ。

我々は、学生運動、高度成長、バブル崩壊やテクノロジーの進歩を体験したり、長年社会との関わってきた財産はあるけれど、気が付けば、ため込んだ経験値からしか物事を判断しようとしないうちを感じる時もある。悟りの境地とは程遠い、有難くないものが仕込まれ中であるようだ。しかし、こんな自己像幻視のような気持ちになるとは、どうやら先は短いらしい。

古漬けになる前に、城南時代を思い出して樽から逃げ出すのが長生きの秘訣かも知れない。思えば、朝、麻布十番のパン屋で好きな女の子と遭遇しただけで一日幸せだったり、鞆の厚みやズボンの落とし具合とか長さに拘ったり、バスケットの上手な奴に憧れるとか、他愛の無い事に夢中になれた、あの感性を取り戻したいものである。

打楽器奏者、作曲家